

## 藤前干潟の保全活用と伊勢湾の環境修復

亀井浩次（NPO 法人 藤前干潟を守る会）

我々は藤前干潟を守る会です。環境修復というものに対しては、1つは、新たな公共事業の隠れみものになるのではないかということ、もう1つは自然破壊の口実とされるのではないかということがありまして、基本的には懐疑的です。しかし、場合によって必要なこともあるということも認識しています。

私たちが活動のフィールドとしている藤前干潟は、名古屋市の名古屋港の一番奥、庄内川の河口部分にあります。江戸時代中期くらいまでは名古屋市南半分というのはすべて干潟だったということです。年魚市潟と呼ばれていました。愛知という地名もそこから出ていますけれども、それが江戸時代中期からの干拓事業によって、干潟が失われていって、最後に100ヘクタールばかり（エリア全体を含め約300ヘクタール）の干潟が残った、それが藤前干潟です。

名古屋港の奥に最後に残った干潟で、本来の面積からいくと非常に狭いものですが、そこに渡り鳥などがたくさん来ているということが、バードウォッチャーの間で知られ観察のスポットになっていました。そこに名古屋市が行政としてごみの処分場を建設しようとしたというのが、我々がこのフィールドにかかわるようになった発端です。名古屋市がそこをごみの最終処分場として埋め立てようとしたことに対して、私たちが反対運動を起しました。それが10年以上にわたって、その活動が続けられてきて、最終的に市がごみ政策を転換して、その結果、この干潟が保全されることになったという経緯をたどっています。

3年前のスペインでのラムサール条約会議においてラムサール条約の登録地になりました。日本で12番目の登録地ということです。干潟としては千葉県の谷津、それから沖縄の漫湖に続いて3番目となりますが、政令指定都市の市域にある湿地としては初めての登録ということです。

現在ではそこに環境省が現地のセンターを2つ作りました。そこに至る経緯や、そのフィールドについて一番よく知っているのは我々であろうということで、NPO法人格を取得して、その2つのセンターの維持管理を受託しております。

私たちの活動はこの干潟の保全というのが基本ですが、実際にそれが保全されてみると、やはりその狭い干潟1つが残ったところで、環境全体にとってそれほど大きな意味を持つわけではない。例えば、その名古屋港の一番奥の干潟1つだけではなくて、名古屋港全体、それからそこからもっと広く伊勢湾全体、それから目を転じて、庄内川の源流から流域全体。そういったものを視野に入れた保全運動をしなければならぬと活動の内容を広げてくることになりました。

現在は、伊勢湾、三河湾一帯にはそれぞれの自然保護団体であるとか、環境団体などがありますので、そういったところと伊勢湾、三河湾全体をよりよい状態にしていこう。現状の問題点を一つ一つ何とかしていけないかというふうに、ネットワーク活動を進めています。

市民団体ですので、実際に事業を進めていく力というのはありません。権限も資金もありません。実際に例えば何かをやっていくのは、やはり行政です。行政を動かす、また後押しするために、社会の意識全体を動かしていくというのが我々のできることでろうと思います。そういったことのために、いろいろな団体とネットワークを組んで、現状の把握及び問題提起を続けていくということになります。

海に関してはその伊勢湾、三河湾のエリア全体ということになりますけれども、例えば庄内川の源流から名古屋市の中を通過して、そこから干潟に至る道筋というのも問題になります。庄内川の源流の1つに、先日まで万博をやっていた海上の森という森があります。だから、そういった森の保全とかいったことなども含めながら活動しています。

庄内川本流の源流部分の森が岐阜県にありますが、その森の健康診断ということもネットワークとして取り組んでいます。市民団体や大学などとも連携して、森に入って、森の状況、木の本数であるとか、それから表土の状態であるとか、そういったものを調べる。それを分析して、それらの状況が川全体にどのように影響を及ぼしているかを明らかにし、現状の改善につなげていきたいと考えています。

本来、藤前干潟という干潟1つに限定した活動であったものが、さらに目を広げて、周りの海域及び流域全体というふうに活動を広げてきているというのが我々の活動の特徴ではないかと思っています。

今後は、伊勢・三河湾フォーラムを組んで、そこで行っているいろいろな団体、市民団体だけではなくて、行政であるとか自治体、それからまた住民、関係者すべてを含めて、伊勢・三河湾の再生に向けて社会全体の意識を変えていきたいというのが今のところ取り組んでいるということになります。

【ポイント】ネットワークの活動の例として、この海域全体で、いろいろなポイントで貝類の調査、二枚貝の調査というものを行っています。我々のフィールドにはアサリはいなくて、シジミしかいないのですが、そういった貝類の調査というのはだれでもできるものなので、いろいろなところで、それぞれの団体が市民レベルで調査を行い、継続してデータを蓄積することで、それなりの結果が見えてくるのではないかと考えています。

# 藤前干潟の保全活用と伊勢湾の環境修復

## Conservation and wise-use of Fujimae Tidal-flat, and Environment Rehabilitation of Ise Bay



藤前干潟



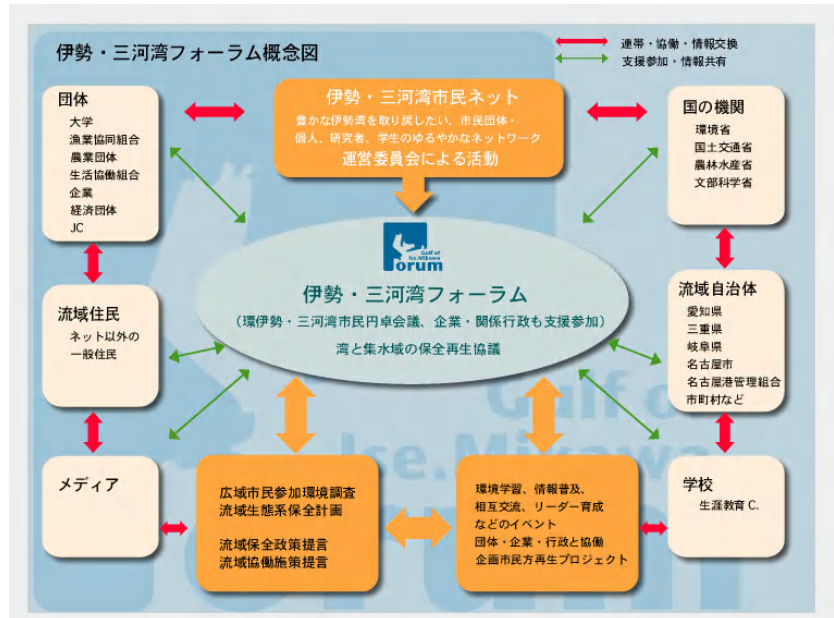
干潟観察



子どもたちと干潟



山から海までの保全再生



### 活動の目指すもの

ラムサール条約湿地・藤前干潟は名古屋港の臨海開発と、名古屋市のゴミ埋立計画から長年の市民活動によって守られた、日本最大級の渡り鳥渡来地である。しかし、その保全是ゴールではなく失われてきたゆたかな伊勢湾を取り戻し、持続的な社会を次代に引き継ぐことをめざしている。そのために、

1. 藤前干潟の保全と活用
  2. ゆたかな伊勢湾を取り戻す
  3. 持続的な社会の実現
- を目的としている。

### 活動場所について

名古屋市区の藤前干潟と周辺(伊勢湾際奥部、名古屋港、庄内川、新川、日光川河口、木曾三川の作り出した河口干潟の一部)汽水域の泥質干潟、日本最大級のシギチドリ渡来地、後背環境としての水田ラムサール登録後、環境省が稲永ビジターセンター、藤前活動センターを設置、2005年3月にオープンした。NPO法人藤前干潟を守る会がその維持管理業務を請け負っており、藤前干潟及び、両センター施設を主たる活動の場所としている。

### 活動期間、頻度について

- 藤前干潟を守る会：発足1987年、2003年NPOに、今年の活動；
1. 両センターでの維持管理業務請負、来訪者対応、説明案内業務
  2. 「干潟の学校」と称する、従来からの自主活動
    - 環境学習、体感学習、研修の指導(有償ボランティア)
    - 月例の「干潟探検隊」および「生き物調べ隊」
    - カタレンジャー養成講座、なごや環境大学藤前講座

3. 委託事業
  - エコルートマップの企画政策
  - 「藤前干潟の日」記念イベントの企画、実施
  - 環境学習プログラムの企画と実施
4. 行政、研究者、企業と協働する活動：藤前干潟協議会
5. 他団体とネットワークを組んで行う活動
  - 日本湿地ネットワーク、ゴミ仲間ネットワーク
  - 伊勢・三河湾流域ネットワークなど

### 関係者について

1. 藤前干潟協議会、運営委員会、部会(保全活用、環境修復、アクセス、鳥獣保護)委員長：千頭聡、副委員長：環境省中部事務所長、辻淳夫  
 会員：目的に賛同し、意欲的に参加し、協働することをのぞむ団体、個人  
 オブザーバー：目的に賛同し、関心を持って見守り、支援することをのぞむ団体、個人。  
 行政：環境省、愛知県、名古屋市、飛鳥村 会員：6団体、オブ：3団体  
 NGO/NPO：藤前干潟を守る会、ネーチャークラブ東海、日本野鳥の会  
 エコプラットフォーム東海、藤前自治会等 会員：14団体、オブ：3  
 研究者：元藤前干潟保全活用構想委員、名古屋大、三重大、日本福祉大  
 中部大学、愛知工業大学、愛知大学、等、個人会員：24、オブ：12
2. 伊勢・三河湾流域ネットワーク 世話人会議 世話人15 代表世話人：高山進、井上祥一郎、辻淳夫  
 伊勢・三河湾とその流域で活動する団体・個人：団体20、個人80
3. 日本湿地ネットワーク 運営委員会 代表：辻淳夫  
 湿地保全活動を進める、全国草の根の活動団体：70、個人：150



### NPO法人 藤前干潟を守る会

(連絡先) 〒466-0002 名古屋市昭和区吹上町1-29-1-211 TEL 052-735-0106 FAX 052-735-0106  
 (インターネット) <http://www.fujimae.org/> <http://www.isemikawa.net/>

### NPO Fujimae Ramsar Society

(Contact point) 1-29-1-211, Fukiage-cho, Showa-ku, Nagoyashi, 466-0002, Japan Phone +81-52-735-0106 Facsimile +81-52-735-0106  
 (Web page) <http://www.fujimae.org/> <http://www.isemikawa.net/>